



石から学ぶ

学校長 小 邑 政 明

滋賀県の長浜駅前に「秀吉と三成、出会いの像」がある。少年佐吉(のちの石田三成)が初対面の秀吉にお茶の温度を調整して、秀吉を感服させた「三献の茶」のエピソードに基づいて作られたものである。

三成は近江国石田村(滋賀県長浜市)の土豪の次男として生まれたと伝えられている。「石田村」の「石田」には「作物の育たない土地」という意味があるので、苦勞の多い少年期を過ごしたのではないかと想像される。

農業には石は邪魔者である。しかし一方、日本では古来から石には様々な霊力が備わっていると信じられ、石にしめ縄を巻き、ご神体として祀ってある神社もある。織田信長も安土城の天守閣に石を祀り、「我がいないときはこの石を我と思つて拝め」と言っている。

日本の国歌「君が代」の中にも、「さざれ石の／いわおとなりて／こけのむすまで」と、さざれ石のような小さな石が巖となるがごとく、我が国が益々繁栄していくことを願った一節がある。石は特別な存在のように思える。

石についてもう少し考えてみる。「転石苔を生ぜず」という諺がある。英語の諺「A rolling stone gathers no moss」を訳したもので、「何事も腰を落着けてあたらないと、身に付くものがなく大成できない」という意味であるが、米国では逆に、「常に活動している人は時代に遅れることがない」という意味で使われるようである。伝統を重んじる

英国と、常に新しいものを求める米国の国民性の違いが出ていて興味深い。

日本人の国民性は君が代の歌詞からすると英国に近いようだ。「不易と流行」という言葉が示すように、自分が置かれている状況や他者との関係をよく認識して、「腰を落ち着ける」のか「新しい流れに向かう」のか、双方のバランスをとっていくことが大切である。

人を石にたとえてみよう。石の霊力は、人の潜在能力や可能性だと考えられる。石は磨いてより輝きを増すが、人は置かれた環境や他者によって磨かれる。異なるのは、石は自分で自分を磨くことができないが、人はそれができるといふ点である。

三成を育てたのは環境や他者の力だけでなく、人一倍の努力があったからだと思う。その努力を支えたのが、国作りに向けた強い信念だろう。三成の旗印「大一大万大吉(だいいちだいまんだいきち)」にその思いがよく現れている。

また、三成は彦根市の佐和山城主として善政を行い領民に大変慕われたという。領民は江戸時代になっても石田地蔵を城趾におき三成を偲んでいたとも伝えられている。

一方で、三成がもう少し自分の置かれている状況や他者との関係が読めていたら、日本の歴史も変わったかもしれない、とも思う。

NHKの大河ドラマ「軍師黒田官兵衛」で描かれる三成像に触れるのも人生勉強になる。

今回は「木から学ぶ」について書きます。